

斎藤 史百首

佐伯裕子 選

●自然

太陽神ジュピターがとはうもない節ふしの鼻歌をうたひ出すともう春であつた

『魚歌』

動乱の春のさかりに見し花ほどすさまじきものは無かりしごとし

うす月のさしそむる頃は身にふかくひそめし言葉響なり出づることし

『歴年』

みづうみに雲も匂ひてうつろへば恋ほしきものの限りしられず

『朱天』

あんずの花ひと夜に褪あする雨なりし我にいかなる夢過ぎにけむ

『杳かなる湖』

窶やうれたる月沈ましめ野は低しまことにくらき幾刻いくしききたる

『うたのゆくへ』

冬に入る生きものの声があはれにて野をゆくときも駈けずに居れぬ

一枚の金属板となる河があり夕べ鈍色にぶいろの思考の固着

肉体に滲しみみくる夜の吹雪の荒れ流砂のごとき白き移動あり

樹木の根と根がくらくやさしくからみ合ふ関聯を思ひゐて昏迷す

水の上に月夜あかるくはたはたとよぎりし蝶は蛋白石おばあるの色

水鳥の胸におされてひそやかにもり上がるとき水は耀かがやふ

春の蛙のまだほつそりと水に泛うきうすき水掻きもあけひろげたり

こんなくだらぬふつうの木木が暴風に吹かれるときに劇的に見ゆ

うしろより昏れてくる野を急ぎつつみどりもくらし水もなほ暗し

赤と黒の丸き背を持つてんとう虫をかつきり広き野の陽に放つ

人も馬も渡らぬときの橋の景まこと純粹に橋かかり居る

『密閉部落』

たましひよりも濃き紫をしたたらせアイリスの朝のつゆけき詠唱

『風に燃す』

ぬばたまの黒羽蜻蛉は水の上母に見えねば告ぐることなし

雪が沁むかぎりなく沁むみづうみのその内奥の暗緑世界

『ひたくれなる』

ことばとなししより風景は腐蝕しはじめたりその中に光る赤き実あはれ

くらきかたのそこと指されて視るものの苔のひかるといふは幽し

言ひさしてことば跡切らす時のあはひ暗き水皺のごときが見えつ

総身の花をゆるがす春の樹にこころ乱してわれは寄りゆく

いかにやさしき狂気をもてば棲み慣るる水より躍びて魚は死ににき

ねむりの中にひとすぢあをきかなしみの水脈ありそこに降る夜のゆき

月 神のごとく昇るにあやまちて声もらしたる森のかなかな

『涉りかゆかむ』

何の鳥の落羽ひとつてのひらに貴き詩片のごとく賜はる

すずしくふかきものに還ると濃紺の空に沈みてゆきし夕鳥

花見ると鬼もやさしきまなこせむ我はもとよりふはふはとなる

雪炎過ぎて菜畑の黄の炎 風はさびしきあそびをなしつ

身のめぐりいちめんに透けてくることごときに危ふし秋の陽の中

麦畑の黄熟すぎておそろしき腐敗の域にすすみるたりき

春の雨は蜜を含みて降るならむほとほと来て身をば緩めつ

『秋天瑠璃』

曼珠沙華葉を纏ふなく朽ちはてぬ 咲くとはいのち曝しきること

盛りすぎし茸の群は枯れずして粘液のごときを流してゐたり

『風翻翻』

(死に体) より放ちたるゆるる月光はなまぐさからず 齋ふべきかな

がらす瓶の藻にさへ春は透きとほりかくれ棲むべき物蔭もなし

五線紙に花散りやまずあたたかに黒い挽歌も音色ふくみぬ

マントを脱げばランプけむれる小屋となり赤い部屋靴も息ふきかへす

柵を廻ればすでに秋なり穀倉の内證はなしや収穫のうた

花あまりなまなまと色をこぼしたればドアをあけて我はためらふ

新しき憲法と村の生活の差を問ふに笑ひて茶をつぎしのみ

豆煎れば豆ひそやかにつぶやけり未来の世も同じこほろぎの声

てのひらも傷口も蒼む村ずみにふかき青葉の日がつづくなり

戸ぶくろの上に巢のある黄なる蜂戸の音ひびくたびに瞋りつ

ブラウスの胸あけひろげて寝てゐる放埒のやうな美風もある

昼ふかき居間に我は居らず台所にも居らずきらきら明き外気にも居らず

アンプルのうすき破片を事務的に寄するとき鈴のごとき音する

引上げて我になまこを買へと見す茶の青のぬらぬらのわれの食欲

うす白きなまこの輪切り不意に来る寂しさはさびしきとして食はむ

壁かげにマツチをすれば浮きいでてわが前も壁 まうしろも壁

土はすでに秋のひそまり灯の下に針山の針の錆びしをぬけば

水の中の昆布にぬめりもどるとき北のなぎさにみぞれは注ぐ

くさいろの眼鏡をかけて北国をのぞめば春の留萌港見ゆ

起き出でて夜の便器を洗ふなり 水冷えて人の恥を流せよ

長き病廊をゆけば終りは非常口そこにのみ明く西日が射せり

薄紙の火はわが指をすこし灼き蝶のごとくに逃がれゆきたり

珈琲はくろき夜の色　こおいひ滓のごときを吐きて死にし人ある

『涉りかゆかむ』

射るごとく月そそぎゐて　老女が食ふがらす片のごときへ寒天へ

動き止まむとする秤あり金属のうすき皿の上雪片を載す

吸ひ上げてあをきインクの充つるを待つしづかなるかもこの吸引は

ふつつりと先は切れたる秋光のここより入りてゆく地下道路

兎の仔見てゐれば雪降りいでぬ柔きねむりのかたまり七匹ななつ

言葉使はぬひとり居つづく夕まぐれもの取落しへあゝと言ひにけり

『秋天瑠璃』

4B鉛筆に毛糸を巻きて書く文字の指たよりなき春彼岸雪

足音をひそめて入りし夜の厨　きのこは昼間より伸びて居り

雉鷄抱いてとりも私も目をつむる風に乗りゆく夢をみるため

『風翻翻』

ガスレンジをまめやかに今日は磨きをり生きる意志などとは別のことにて

マッチの軸・割箸・鉛筆みな燃せばえんびつの木がもつとも香る

● 老い

きのふは麋羊がけふは老牛がつながれてながく鳴きゐる電柱があり

『密閉部落』

水銀色の髪となりしかば朱に染めて風に燃さんかな——惜命しやくみやう

『風に燃す』

緑内障の母の眼の中くらがりに金砂子きんすなご散る昼夜分かつず

老いはいかにさびしきものぞ　抽出ひきだしのものの整理されておほかたは空から

山坂を髪乱れつつ来しからにわれも信濃の願人ぐわんにんの姥

『ひたくれなる』

老不気味おい　わがははそはが人間ひと以下のえたいの知れぬものとなりゆく

『涉りかゆかむ』

惜しまるるこれの命といふべくは老いすぎにけり　人泣かぬなり

我を生みしはこの鳥骸のごときものかさればよ生れしあことに黙す

めぐり来てこの北国の秋風にわれは老婆となりて候

老薄となりしわが眼を翳らしむ八月の死屍の黑白写真

老鴉・老猫いづれ喉太のどぶとにあなどるごとく且つ訴ふる

ひりひりと春の野鳥の啼きたてて老女さびしむ空みづあさぎ

くしけづるわが染髪は燈に透きてわかきぬばたまの夜ぞ恋しけれ

龍眼の果肉を好むわが舌の老いながらなほ味はひ深む

するすると夕闇くだり見て居れば他人の老いはなめらかに来る

老いたりとして女は女 夏すだれ そよと風のごとく訪ひませ

老いてなほ艶えんとよぶべきものありや 花は始めも終りもよろし

八十余年たどきなく来てなほつづく日々つらぬけよ 一声の笛

けろりと軽く生きて居たりしそのさまのそろそろ似合ふ頃ではないか

友等の刑死われの老死の間埋めてあはれ幾春の花散りにけり

死者のとなりに並べ書かれてわれの名の古りにけるかな明治の生れ

ぐじやぐじやのおじやなどを朝餉とし何で残生が美しからう

枯るると見えまた芽を吹きし無花果を祝はむか生死の序にしたがはぬ

草原さうげんの枯生につづく古畳 蝶もかまきりもわが側そばに死す

老いてゆくものの作法を心得てひつそりと微かすかにありし老鶏

老死は深き默契にして肯うべなへばひたひたと寧やすきしづけさありぬ

すでにしておのれ黄昏 うすら氷の透けるいのちに差すや月光つきかけ

冬茜褪せて澄みゆく水浅瀬 老の寒さは唇くちに乗するな

古い人は悲も喜も同じ顔を持ちすこし上下に傾くるのみ

わが上の九十年を流れたる月日痕跡あとなきことのやさしさ